

思はれるのである。この婦人も賢夫人で、晩年まで貧乏であつた篤胤の家政を助け、夫をしてよく大成させたのである、篤胤は六十六才の時、その言説が幕府の忌諱に觸れ、郷里の秋田に追放の刑に處せられたが、夫人も亦、夫に伴つて秋田に下り、天保十四年六十八才で篤胤がこの世を去つたとき、その枕頭に侍して最期を護つたのである。篤胤が江戸を追放されてから後、秋田における動靜は、この夫人が日記に書き記して残しておいたので篤胤の晩年の事がよく知られる。まことに夫に對して終始忠實な賢夫人であつた。

幕末の勤皇烈女

幕末時代に、多數の勤皇烈士が、皇事に奔走し、一身を捨てて働いたかひがあつて、輝かしい明治維新の黎明を迎へることが出来たが、これらの勤皇家が活躍した蔭には、これを勵まし、助けた女性が現はれてゐることを、忘れてはならない。

さうした勤皇烈女の中で、最も世に知られてゐるのは、野村望東尼と松尾多勢子である。この二人は男まさりの婦人で、花々しい活躍をするともに、又歌人としても、すぐれた詠歌を多く残してゐるので、早く有名になつたのである。

野村望東尼

野村望東尼は、福岡の人。藩士野村貞貫の後妻となつて、よく先妻の子三人を育てたが、安政六年、五十四才の時、夫に死別したので剃髪して尼となつた。當時、福岡藩では藩論が、勤皇、佐幕の兩派に分れて互ひに抗争してゐたが、望東尼は、平野國臣、中村圓太らの勤皇派に味方して、陰に陽にこれを助けるのに大いに努力したのである。これらの勤皇派の人々が捕へられて、獄舎につながれた時、望東尼は、歌を詠んで贈り、或は物を差し入れて慰めるとともに、その釋放のために盡力したので、皆、許されるやうになつた。又、高杉晋作が福岡に來た時にも、その山莊に迎へて甚だ歡待した。併し、遂に難は望東尼自身の上に及んで、慶應元年、流刑となり、玄海灘の孤島姫島に幽囚せられた。時に六十才の老齡であつた。かねがね望東尼の世話になつた高杉晋作ら同志の人々は、共に相計つて、ひそかに望東尼を救ひ出し、長門に圍まつたのは、その翌年の事であつたが、既に健康を害してゐた望東尼は遂に慶應三年六十二才で周防の三田尻に歿したのである。まことに悲運な晩年であつた。

望東尼は、歌を福岡の歌人、大隈言道（ことみち）に學び、勤皇愛國の情熱に富む秀歌を多く残した。その歌集を「向陵集」と云ひ、又文久元年に上京した時の「上京日記」、特に姫島に幽囚の際の「姫島日記」や、周防で書いた「防州日記」など、優雅な文章に歌を交へて、その生活や人々の動靜を記録した作品には、特に心のひかれるものがある。

それのみならず、望東尼の孫の助作も遂に勤皇の大義に殉じて難に死し、助作の妻の父も叔父も皆、切腹を命じられた事は、悲報を聞いて、姫島日記の中にも盡きせぬ哀情を記してゐるところである。まことに望東尼の誠忠が傳へられて、その感化の及ぶところ、一族をあげての勤皇であつた。

松尾多勢子

松尾多勢子は信州下伊那の人で、歌を同郷の福住清風や隣國遠江の石川依平に學んだが、これらの歌人は、いづれも本居宣長の系統を引いてゐる。又、伊那地方には、平田篤

胤の國學が入つて、その教學を信奉する人々が多かつたが、多勢子も亦、それらの人と交り、その影響を受けるところ多く、遂には、篤胤歿後の門人に列してゐる。かやうにして宣長、篤胤の國學の思想が、自然、多勢子に勤皇の志を、植ゑつけることになつたのである。

文久二年、五十二才の多勢子は、濃厚で病身の夫松尾淳齋の許しを得て上京し、堂上公卿の知遇を得るとともに、勤皇志士とも親しく交はつて、ここに勤皇家としての存在を明瞭に示すことになつた。その間、最も交際の深かつたのはやはり同門の人々であつて、長尾郁三郎その他、足利將軍の木像の首を、徳川將軍に擬して、梟首した事件の關係者と、親密に往來してゐたため、多勢子も連累者として追跡せられたので、一時、難を長州邸に避け、やがて歸郷するにいたつたのである。それは上京の翌年、文久三年の事である。明治元年にも亦、再度上京して、御一新多端なる際、岩倉家に入つて、國事に奔走するところがあり、又その子息は、官軍に従軍して、幕軍の討伐に當つた。もつて女丈夫の面目を見るべきである。明治二十七年に、八十四才で歿した。歌集を「松の雫」といひ、又「都

のつと」「千々の草々」「露の玉」などの遺稿を書き残してゐる。

この二人の女丈夫ほど世に廣く知られてゐないが、それにも劣らぬ氣節、詞藻のすぐれてゐたのは、宇都宮の人、大橋卷子である。

大橋 卷子

大橋卷子は、大橋知良の女で、勤皇學者、大橋訥庵の妻である。父の知良は宇都宮の商人、菊池次右衛門の養子となつて、商業の道にも長けてゐたが、又、文雅に親しみ、社會事業に力を盡して、蓄財を貧民救済のためには、惜しげもなく散ずるといふ人物であつた。知良の妻、菊池民子は家付の女で、知良はその養子として大橋家から菊池家に入つたのであるが、民子はよく夫に仕へて貞淑であるとともに、又、歌道を重んじ、情誼に富み、夫唱婦隨の、徳望、趣味を同じうした好一對の夫婦であつた。和歌を、橋千蔭の系統を引く吉田敏成に學び、歌集を、「倭文舎集」と云ふ。その中には、

すべらぎの御國おもはば二つなき

命をあだに散らさずもがな

咲き匂ふときこそあらめものふの

心の花よあだに散らすな

のごとく、愛國の熱誠を籠めて、丈夫の志を激励した歌も見える。

この夫婦の間に生れたのが、大橋卷子と、その弟の菊池教中である。父の菊池次右衛門は、家を教中に譲つて本姓に復したから、卷子も大橋姓を稱した。母の感化で、早く和歌を嗜み、吉田敏成に學んだが、大橋訥庵の人物を見込んだ父の懇望で、訥庵を養子に迎へた後は夫の感化で、凛然たる氣概を持つ婦人として勤皇の至情を和歌にうたひ出したのである。なかにも、孝明天皇の皇妹和宮の將軍家に降嫁せられる事を慷慨した長歌は有名である。

國のため生野の道にますらをが

霜と消えぬと聞くはまことか

は、文久三年に平野國臣らが旗擧した但馬の生野銀山の義擧が失敗に終つた事を聞き傳へて詠んだ歌である。

これより先き、文久二年正月に坂下門で老中安藤信正を襲つた事件が起つた。その中心人物の一人には、他ならぬ卷子の弟教中も加つてゐたのである。しかも、その関係者の多くが、大橋訥庵の門下であつたから、早くも一味の動靜を探つてゐた幕吏は、事件の起る前に訥庵を捕へて獄に繋ぎ、次いで教中も亦、縛についた。併し、獄中の不健康な生活から兩人とも病み、訥庵は七月十二日に歿し、教中も八月八日にその跡を追うて此の世を去つた。一時に夫と弟を失つた卷子の哀傷、又、卷子の母民子の悲歎はどうであつたらうか。まことに、當時の勤皇家の母、妻たる婦人の境遇ほど、荆の道を歩み、苦しい試練を受けたものは類が少いのである。この間の消息を傳へた書が、卷子の書いた「夢路日記」である。二人の就縛した時から、釋放後相次いで歿する前後までの事を典雅な文章で記し

たものであるが、當時、夫の私塾のある江戸に住んでゐた卷子は、宇都宮なる母が、この報を聞いたときの悲歎の情を思ひやつて心配してゐるのに對し、母のよこした返書は、案外に、沈着であつたので、卷子も大いに安堵した心持を、

かゝるほどに、故郷よりとて消息あるに、とる手も心もとなう封じ目ときて、涙に目もくれて見えぬを、たどるたどる打見れば、母君、平には、いとすこやかに、猛きものふとはいへども得も及び難う有り難きまで雄々しうて、何事も世の理を深く思ひとりて物し給ふらん、少しは心も落ちる侍り。

と記してゐるのであるが、又その詠んだ歌の中には、

天かける魂の行方は九重の

御階のもとをなほや守らん

のやうに、護國の靈と化した夫や弟を追慕する作が見える。前にあげた二首は母の民子が教中の志を勵まし誠めた歌で、母娘並んで相共に勤皇の精神の篤い女性であつた。卷子

は、夫が幕吏に引かれた後、當局の捜査、訊問に對しても従容として應對し、むしろ幕吏をして驚かしめるほどの平然たる態度を持して少しも取り亂したところがなく、よく後の始末を整へたのである。民子は元治元年に年七十で歿し、卷子は、明治十四年に五十八で歿してゐるから、訥庵、教中の逝いた文久二年には、母の民子は六十八、女の卷子は三十九であつた。

野村望東尼は、卷子の「夢路日記」を読んで深く感動した心を、「向陵集」の中で次のやうに記してゐる。

江戸なる大橋正順（訥庵の本名）といふ人の妻卷子の、書き記しつる夢路の日記てふ書を読み、その節義の心に感じけるまゝに、文もてそが家の事ども何くれと問ひやりぬ。さて彼の日記の後に書き添へける。

玉といふ玉は碎けて世の中に

さらぬ瓦のかゞやくはなぞ

まことに、同じ勤皇の女性として、心の通じる事の甚だ切なるものがあつたに違ひな
5。

兒島みつ子

大橋卷子に關聯しては、同じ宇都宮の勤皇家なる兒島草臣の母ます子、妻みつ子の事も亦、忘れてはならない。兒島草臣は、菊池教中の同志として、やはり坂下門事件の中心的な人物の一人であつた。しかも、兩人ともに宇都宮の豪商である點も同様であつた。草臣は、通稱強介と云ひ、兒島家から出て、玉屋と云はれる商家の手塚藤兵衛の養子となつたので、手塚強介とも稱せられる。この手塚藤兵衛の妻がます子であり、その女がみつ子であつて、草臣は、みつ子の婿として迎へられた點は、大橋訥庵と全く境遇を同じくし、又その義母と妻が、相共に烈々たる勤皇の精神に燃えてゐた事も亦、事情が同じであつた。時と處と家族の關係が全く同一の勤皇家を出してゐる事は不思議なほどである。

草臣は、藤田東湖の著書を読んで深く感じ、その教を受けて、勤皇の大義に志を立てたのであるが、草臣の精神をよく理解した義母と妻は、草臣の衷情に心を打たれ、運動に挺身する草臣を助けて惜しむところがなかつた。しかし、草臣は病に臥して、坂下門の擧に加はることが出来ず、空しく捕へられて江戸の獄に繋られるにいたつた。その間、養母のます子は、草臣を激勵し、又、當局の召喚により江戸に出でて、その訊問に應じたが、過勞のためか、急に發病して、江戸の旅宿で卒去したのである。時に文久二年、四十九才であつた。草臣も翌文久三年に、その跡を追つて獄中に歿してゐる。

草臣の妻みつ子は、母のやうな女丈夫ではなかつたが、よく夫に仕へて勤皇家の妻たる純情を汚すまいと努めた可憐な女性であつた。みつ子は、後に操子と名を改めてゐる。夫の死んだ翌々年、慶應元年に、二十九才で歿したから、夫より一つ年上の妻であつた。

草臣が安藤信正の專横を慨して事を計らうと企て、同志の糾合に家を出るとき、別れに臨んで、母のます子は、

かくぞとは思ひ定めしことながら

さすがに憂きは別れなりけり

と詠み、妻のみつ子は、

何ごととも女々しく何かたゆたはん

ますら猛雄の妻となる身は

と詠んで、その決意を示した。かくて、故郷を出て、運動に挺身する草臣を勵ました母の歌には、

八百萬の神もあはれと見ますらん

國につくせる赤き心を

梓弓岩をも通す心して

ますら猛雄の思ひたわむな

天皇に身は捧げんと思へども

世にかひなきは女なりけり

女にこそあれ我も行くべき道を行きて

やまと心は劣らぬものを

しきしまの道は一つを女なりとて

なに劣るべき大和魂

などのごとく雄々しくすぐれた歌に富み、妻も亦、

しらくもの里をば八重に隔つとも

心のあふぞ樂しかりける

大丈夫はますら男と知るわれは

清き心を君に磨かん

なに事もたゞ大皇のみためぞと

思へば憂きも憂からざりけり

の如く優しくも亦志氣に満ちた絶唱を夫に贈つてゐる。これらの作、後代に傳へて何れも女性の鑑とすべき名歌である。

黒澤登幾女

水戸藩の黒澤登幾女も有名な勤皇の女性であつた。登幾女は、常陸國東茨城郡岩船村鍋高野なる修驗道の寶壽院黒澤光仲の女で、父に國學を受けた。夫の鴨志田彦造に死別した後は、寡居して、子女に讀書を教へ、又、歌道を楽しんで生活してゐた。たまたま安政六年の大獄に際し、藩主水戸烈公が幽閉せられたのを憤激して、單身、みづから京都に上り、藩主の雪冤運動を試みたのである。時に登幾女は五十四、しかも七十三になる老母が家にあつたが、老母もよく登幾女の志を解して、家政を引き受け、後顧の憂なからしめた。この時の嬉しさを、登幾女はその作になる有名な長歌の中で、

老の身は五十の四になりぬれど、七十三の老の母、朝夕さらす仕へつゝ、別れてよ

すを嬉しくも、共に心を添へられて、わが國のため君のため、おくれなとりそと男
々しくも、老の言葉を力草。
とうたつてゐる。

この長歌は、東坊城聰長に呈して、藩主の冤罪を訴へたものであるが、後、畏くも天皇の勅覽に入つたといふ。かくて、幕吏に捕へられ、江戸に護送せられて糺問を受けた結果、追放の刑となつたので、郷里に歸る事が出来ず、下野國茂木町に住んでゐたが、明治の御代となつて、故郷に復歸したのである。明治八年には、朝廷、その忠勤を嘉賞せられて、終身祿として米十石を下賜あそばされ、明治二十三年に八十五の高齡で歿した。和歌の他、俳諧、狂歌をも好み、その文章には、「上京日記」「捕はれの記」などがあつて、當時の事情を傳へてゐる。

津崎矩子

この登幾女及び望東尼と並んで、當時勤皇の三女傑と稱されたのが、村岡局むらおかまである。村岡局は本名津崎矩子、大覺寺宮の諸太夫、津崎元矩の女で、初名は梅子と云ひ、近衛家に仕へて老女となり、村岡局と呼ばれたのである。主人の近衛忠熙は皇威振張の志があつたから、その命を受けて、宮廷と浪士の間に立ち、勤皇のために大いに奔走、斡旋するところがあつた。即ち、月照と計つて、攘夷の密勅を水戸藩の鶴飼吉左衛門父子を通じて、烈公に下されたのであるが、この事が幕府に洩れて、安政の大獄の直接の原因となつた。かくて、村岡局は月照を薩摩藩の西郷隆盛に托して、落ち延びさせたが、その結果、兩人相抱いて海に投じ、遂に月照の世を去つた事は、世によく知られてゐるとほりである。その他、鶴飼吉左衛門を始め、多くの連累者が捕へられて刑死し、村岡局も七十二才の高齡であつたが、江戸に護送せられて糺問を受けた。しかし、幸ひに村岡局の云ひ開きが通つて、再び都に歸されたが、又文久三年にも再度幕府の訊問を受けてゐる。女ながらも、幕府にとつては一敵國の感があつた。御一新の後、明治五年には、功を賞せられて、終身祿

米二十石を下賜せられてゐる。併し、その三年に、八十八の天壽を全うして歿した。「嵯峨野の花」と題する歌集や、日記を残してゐる。

若 江 薫 子

村岡局と共に活躍した女性に、若江薫子がある。伏見宮の諸太夫若江量長むつなの女で、幼より學問を好み、特に漢學に長じて號を秋蘭と云つた。昭憲皇太后の御幼時に御進講申し上げ、御入内の際にも、種々心を配るところがあつた。横井小楠を襲つた志士を寛刑に處せられるやうに建白したり、坂本龍馬を圍まつて危険を救つたり、男まさりの活躍をして、維新の後にも、時の政府の文明開化策に反對したため、明治四年には禁錮の刑に處せられてゐる。その後、家計が衰へたので、岡山、香川の各地を流浪し、明治十四年遂に讃岐の丸龜で客死した。時に享年四十七才、勤皇烈女の間では、年少であつたと云ふべきである。

有村蓮壽尼

櫻田門に井伊直弼を襲つて首級をあげた有村次左衛門と、その別働隊として關西に潜行中捕へられた次左衛門の兄の雄助とは、薩摩藩士有村仁左衛門の子であるが、仁左衛門の妻、有村蓮壽尼も、武士の妻らしい廉恥を辨へた婦人であつた。次左衛門は目的を達した後自殺したが、兄の雄助は情勢の推移を察するため捕へられて鹿兒島に護送せられ、自宅に檻禁せられる事になつた。併し蓮壽尼はわが子を家に入れず、他の人々が、それぞれ壯烈な最期を遂げてゐるのに、おめくくと命を永らへて郷里に送り返されるやうな不甲斐ない子には顔をあはさぬと叱責したので、雄助もわが家の鬨をまたがずに、自決するにいたつた。併し、蓮壽尼の胸中には、萬斛の涙が溢れてゐたのである。

雄々しくも君に仕ふるものものふの

母てふものはあはれなりけり

の一首が、その母の衷情をうたひつくして餘すところがない。明治二十八年に年八十八で歿してゐる。

眞木小棹・他

勤皇志士の中心的位置にある久留米の水天宮の神官、眞木保臣（むねたも）の女の小棹（こさざ）は、父の意をよく體して、文久二年、壯圖に出で立つ父の首途（かみみち）を祝し、

梓弓春は來にけりますらをの

花のさかりと世はなりにけり

と詠んだが、その翌々年、元治元年の禁門の變において戦に敗れ、眞木保臣らは天王山で割腹して悲壯な最後を遂げた。この報知を小棹が弟の菊四郎に書き送る書狀に、「と、様の打死悲しくは候へども、皇國の御爲とおもへば御互にめでたく、かしこ」と記し、

きく人もあはれと思へ小男鹿（こおしか）の

幕末の勤皇烈女

聲の限りはなきあかしつゝ

と詠んだ歌は萬感を籠めた慟哭に満ちてゐる。土佐には天忠組の幹部の吉村虎太郎が文久二年、藩を脱走するとき、わが子を勵まして、

四方に名をあげつつ歸れ歸らずば

おくれざりしと母に知らせよ

と詠んだ母がある。この母の意のごとく虎太郎は、翌文久三年に大和十津川で同志の烈士と義兵を挙げ、遂に花々しい戦死を遂げたのである。虎太郎が脱藩後兩親にその近況を報じた手紙にも、親を思ひ、國を憂ふる誠心が溢れてゐるのは、母の激勵に應へる意もあつたのであらう。(この歌、岡不可止氏によれば、肥後藩士井口忠三郎の母の詠といふことである。)

土佐の勤皇黨の頭目は武市半平太であるが、その弟の田内衛吉は、實家を出でて田内家を嗣いだのである。やはり國事に奔走し、後捕はれて藩獄に繋がれ、自殺したが、母と獄

中ひそかに贈答した和歌を集めたものを「北山時雨」と云ふ。

その母の歌に、

老いぬれど心はおなじもののふの

親も子ゆゑにたゆみやはせぬ

は雄々しくも亦哀れである。

梅田信子・川瀬幸子

安政の大獄に殺された梅田雲濱の妻信子も貧窮の中にあつて、よく夫を助け、その志を全からしめた内助の功は世に廣く知られてゐる。近江膳所藩士の川瀬太宰の妻幸子は、夫が獄に下り、自宅が搜索を受けたとき、跡始末をして夫を煩はさぬ用意を調べたのち、從容として自殺をとげてゐるのである。

その遺詠として、

いつまでか晴るるを待ちて堪へやらん

乾くひまなき五月雨の空

といふ歌が傳へられてゐる。

併し、志士たる者の妻には勿論、このやうな覺悟に生きてゐた婦人が多かつた事であらう。この母と云ひ妻と云ひ、勤皇の志は、女性の精神に支へられて、その光を輝かす事も出来たと云つてよい。まことに勤皇歌人の佐久良東雄が詠んでゐるとほりに、

天皇に仕へまつれと我を生みし

わがたらちねぞたふとかりける

である。たらちねの母の尊さ、日本の女性の崇高な天分をしみじみと感ぜずには居られない。

伴 林 光 平

近頃、伴林光平の稲木抄を読んでゐたら、かういふ文章にぶつつかつた。

皇國の大道は、即神世のまゝの正道にて、其正道、頓たがて男女の互にいとほしむ眞情を諷うた出だる詠歌の一道なり。

稲木抄は歌道の作法を教へた書であるが、歌道の神髓として、それが皇國の大道であり、神ながらの道であることを明かに自覺した歌人が、古來どれほどあつたであらうか。今日でもこの事を心の底から悟つてゐる歌人は極めて少いと云つてよい。光平は、その極く少数の一人である。

それとともに皇國の大道が「男女の互にいとほしむ眞情」を「離れては知るべからず」

と喝破してゐる光平の心の深さを、今日となつては、何人が解するであらうか。正純な情愛に基き、まこと、真心に徹した人情の眞實が、かうして歌道を培ひ、生活を潤ほして行く。皇國の大道を離れた男女間の情愛は廢頽的な痴情に過ぎないから、光平も「皇國の正道や衰へそめ、終に和歌は、皇國の正道なることをも打忘れて、唯淫夫婦女子の翫草の様になりゆき」と云つてゐる。しかし又、一面においては、かうした人情の自然を失つた行き方に、わが國の道の本體を忘れがちな傾きがあるやうでは、聖業の翼賛を眞實に正しく行ふことも甚だ難かしいのではないかといふ憂へがある。そこで、光平のごとき人物が、あらためて思ひ起されるのである。

光平は、もと僧侶であつたが、翻然皇道に目ざめて還俗し、歌道と古典を講究して、門生を導き、ひそかに幕末の風雲を睨んで期するところがあつた。その研究の業績の中では、近畿の山陵踏査が最も重要な意義を持つてゐる。即ち、尊い御陵が當時打捨てられてゐることを慷慨して、その調査に當り、將來、立派に整備せられることを願つたのである。

さうしてゐるうち、いよいよ社會の情勢が切迫して、文久三年八月には有名な天忠組の義舉が起り、同志の一人として、光平の所にも檄が飛ばされて、驟起を促されたのである。

當時、光平は、大阪に講學のため滞在してゐたが、この報告を受けると、直ちに大阪を出發し、徹宵、強行して現場に向つたが、この間の行程二十里に近い、齡五十を越えた光平の壯なる意氣を思ふべきである。

かくて、天忠組の參謀兼記録係として活躍することになり、天忠組の布告、命令、その他萬般の文章は、すべて光平の手によつて草されることになつた。しかし、時機未だ至らず、戦また利あらずして、遂に義舉は失敗に終り、忠誠の人々多くは戦死、或は自刃して果て、又或者は捕へられて獄に繋がれたが、光平も亦、足疾のため捕縛せられて、獄舎に投じられ、遂に京都六角の獄で斬刑となつた。義舉の翌年、元治元年二月の事で、光平は年五十二才であつた。以上が、その生涯の概略である。

光平は、歌人が本領で、多くの詠歌を残してゐるが、みづからその辭世と定めた

君が代は巖とともに動かねば

碎けて歸れ沖つ白波

は、近頃愛國百人一首にも入つて廣く世に知られてゐる。天忠組の顛末を自己の體驗を通して書いた「南山踏雲録」は、奈良の獄中で筆を執つたものであるが、歌文を交へた雅文で記し、悲痛の感に満ちみちてゐて、文學としても最も高い價值を持つものである。かうして、文學に徹しつつ志士として、一身を國に捧げ、維新回天の大業に参じた光平の義魂を、此の時に當つて、思ふことが甚だ切である。

最後に、光平の歌一首

ますらをの屍草生す荒野らに

咲きこそ匂へ大和なでしこ

は、當代の女性に送つても甚だふさはしい歌として、その優しく雄々しい、無限の美しさに溢れてゐる心を深く深く味ひたいと思ふ。

女性の精神と生活

花に現れた女性精神

一

花は女性の美しさを思はせる。それで支那でも古くから、花顔とか花容とかいふのは、婦人の顔貌の形容で、わが國では又、花のかんばせなども云つてゐる。そのやうにして、花の色彩に女性の容色を見、花の形に女性の姿を思ひ、而して花の風情に女性のことを感じるのは、すべての人々に共通した心持であらう。萩を鹿の妻とし、牡丹に唐獅子を配するのも、花の面影に女性の優しさを認めるからである。枕草子にも、梨の花について、かう書いてゐる。

梨の花、世にすさまじき物にて、近うもてなさず、はかなき文付けなどだにせず、愛敬なくわたる人の顔など見ては、譬ひに言ふも、げに花の色より始めて、あいなく見ゆるを、もろこしには限りなきものにて、文にも作る、なほ、さりともあるやうあらんと、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき匂ひこそ心もとなうつきためれ。楊貴妃の帝の御使にあひて泣きける顔に似せて、「梨花一枝春の雨を帯びたり」など云ひたるは、おぼろげならじと思ふに、なほいみじうめでたき事は類あらじと覺えたり。

梨の花が白いのを愛敬のない人に譬へ、しかも、その白花の中にも端にほのかな赤味を帯びてゐるのを認めて、楊貴妃の美貌に比した、和漢のこの花に對する感受性の相違を説いて、梨の花が、やはり捨てたものでないことを明かにした文章であるが、このやうに花を見ては、女性の顔かたちに思ひ及ぶのは、東西軌を一にしてゐるやうである。

ところが、同じ梨の花であつても、近世の小歌の中に、
なよし／＼はなよし、梨のあだ花、なりはしもせで、なると名の立つなよし。

とうたはれてゐるのは、梨のあだ花、即ち實のならぬ花に、女心の情なさをよそへてかこつたもので、やはり、梨の花に、さうした人心の無情を思はせるものがあるのであらうか。これと同様の内容を持つものには、

ならぬあだ花眞白に見えて

憂き中垣の夕顔や

と云ふ室町小歌があつて、これは、夕顔のあだ花をうたつたのだが、いかにも、梨と云ひ、夕顔と云ひ、花の大きさには両方で相違があるとしても、あだ花を思はせる頼りなさはかなさを感じさせる點では、共通した趣を持つてゐる。さうして、これらになると、最早、花の色香といふやうな見た目だけのことではなくて、もつと深い花の心にまで入つて來てゐるやうである。梨の花や夕顔の花が、その寂しさの中に、何か實のならぬ心の冷たさを湛へてゐるものであるから、特に花をもてはやしたりしないのは、わが國では古來人々の間に流れてゐた感情であつた。梨の花が「世にすさまじき物」と云はれてゐるのは、

花に現れた女性精神

枕草子にも記すとほりであつたが、夕顔については、源氏物語にも、「かう怪しき垣根になむ咲き侍りけるもの」となし、源氏君をして「口をしの花の契や」と歎じさせ、又、花のみならず、「枝も情なげなめる花を」とも云はせてゐるのである。そのやうな、枝も花も無情なまで、冷たく沈んだ夕顔の風情を可憐な女性によそへたのは、源氏物語が、この花に寄せた同情であつたこと、枕草子が、世に顧りみられぬ梨の花に、白樂天の長恨歌によつて、楊貴妃の美貌にも譬へられるやうに美しさを見出してゐる心持と似通つてゐる。同じ古い小歌でも、梅になると、

梅は匂ひよ木立はいらぬ

人は心よ姿はいらぬ

とうたはれて、梅の清楚な姿に、心の美しさをよそへてゐるのは、古今ともに變らぬ同感である。即ち、梅になると、もつそこに認められる美感は梨の花や夕顔の花について感じるものと甚だ距離があるのである。その點は櫻の花になると一層著しく、又、その間の

相違がはつきりして來る。

二

本居宣長が詠んだやうに、「朝日に匂ふ山櫻花」を、やまと心に比するとき、それは最早單に女性の心だけを現はすものではなくして、廣く日本精神を「朝日に匂ふ山櫻花」で象徴したのである。そのやうに、櫻の花は、わが國を代表する花であるだけに、ただ女性の側のみではなく、すべての日本人の心が、この花によつて現はされてゐる。即ち、海軍の九軍神の一人、古野少佐の辭世にも、

君がため何か惜しまん若櫻

散つてかひある命なりせば

とうたはれてゐるやうに、自己の生命を、日本人の櫻の花の潔きよく散るのに比した心持は、武士の間にも同様に通じるものがあつた。さう云ふ意味では、清楚で高雅な風情を

持つ梅が日本婦人を象徴するならば、櫻の花は、むしろ日本國民全體の精神を現はすものであることは、さながら富士山によつて、國土の魂が感じられる心持と共通してゐるのである。

梅にも、紅梅と白梅との差があつて、もとより、日本婦人にふさはしいものは、その白梅の汚れに染まぬ姿であらう。尤も、枕草子では、「木の花は、濃きも薄きも紅梅」と云つて、紅梅の方を賞揚してゐるのは、梨の花を愛敬のないものと考へた當代の人士にとつては、白梅も亦、風情に乏しいすさまじいものと感じられたためでもあらうか。併し、それにもかゝらず、わが國では、やはり白い花に崇高な感情を味はつて、特に女性の場合にはそれが適切な効果を持つものと考へられてゐた。それで、泥中の蓮といふものは、白蓮に女性の純潔な精神を認めて、殊更、濁りに染まぬ蓮の花の色を、浮薄な人物の多い社會に於て、なほ正しい心を貫きとほすことが出来たやうな場合、さういふ女性のをしい心情に移して眺めようとしたものである。或は又芭蕉がその門弟の女性を句に詠んで、「白

菊の眼にたててみる塵もなし」と表現してゐるやうに、白菊の、その清らかな美しさに、一點の塵もない清淨無垢の心を、操正しい日本女性の精神として觀じようとした。それは姿かたちの美しさばかりでなく、より多く心の美しさでなければならぬ。白梅、白蓮、白菊、といふ一連の白い花が象徴するものは、あくまでも氣高く、しかも慎ましやかで、内に含蓄するものの豊かな中に、凜然たる氣品が現はされてゐる女性の姿と心でなければならぬ。たださうした清淨な美しさが崇高であるだけに、一種の近寄りがたい品格を持つてゐて、そこに、親しみにくいものを感じさせるとすれば、それが取りも直さず愛敬の薄いと云はれる所以であるかも知れない。併しそれでもやはり、白い梨の花や夕顔などと違つた情趣を、白梅や白菊は備へてゐるのであつて、つまりそれが、これらの白い花の持つ氣品と、小さい梨の花や弱々しい夕顔の花に感じる頼りなさとの間の相違である。さうして、雪を冒しても咲く白梅に、春の諸々の花にさきがけて、強くをしく花を開く凜然たる姿と、みさを正しい精神を認め、純白な中に豊かで大らかな暖みを湛へてゐる白菊

が、狎れがたく冒しがたい志操をもつて、しかも十分に人々を引き寄せる魅力に富むものである事を知るとき、これらの花が、日本女性に最もふさはしい特色を、おのづからに備へてゐる理由もわかるであらう。かくして、梅も菊も、やはり、わが日本の花、特に女性の花でなければならぬのである。櫻の花が、日本國民の代表であるならば、春の梅、秋の菊、ともに、それぞれの季節を飾る日本女性の姿である。

もう一つ、昔からよく云はれてゐる諺に、山吹の事を口なしと云ひ、山吹を染料に用ひた黄色の事を口なし色といふが、これは、山吹の實が熟しても開かないところから、口無しと名づけられたものであるといふ。それからして、山吹の花が眼につくころになると、この口なしの諺が人々の印象に上つて來るわけであるが、それが又おのづから、人の心の上に移されて、教養として必要な身だしなみに、口無しの諺が用ひられるのである。それで、口無しとは、時として、女の慎しみ深い控へ目を示す、謙讓の美德でもあつたり、或は又、何らの應答もしない冷淡、無慈悲、愛想のない態度、さういふ意味を現はすときに

も用ひられたりする。つまり、善惡兩様に解釋せられるわけであるが、いづれにしても、それが山吹の花の色や姿に即するといふよりも、單に、口なしの言葉にすがつた連想に過ぎないのであつて、山吹の花の持つ特色とは云ひがたい。

山吹の花も、やはり淡い色である。かうした、白色系統のものに、注意が引かれるものが多いやうである。櫻の色でも、赤味がよつてはゐるが、白に近いところがあると云つてよい。かうした白色系統の花に、何か清淨で崇高なものを感じるところから、特に取り上げられる場合も多いのであらう。併し、梅にも紅梅があつて、愛好せられてゐたやうに、櫻でも赤みがかつたものがあり、さういふ赤系統の色も、やはり注意の引かれる事があつた。上古の歌では、「葉廣ゆつま椿」とか「つらつら椿」とか云つて、椿が注意に上つてゐるが、それは、ただつやつやした椿の葉だけではなく、椿の赤い花が人の心を引きつけたものと思はれる。それは又一面において、上代人の情熱的な心が、おのづから椿の花の濃厚な色にも通じるところがあつたからであらう。さう思つてみると、今日でも、椿の花

に南國的な色彩を認めて、南國の情調と、さうした土地の女の熱情とを、椿の花によつて象徴するやうな傾きがある。實際、暖い土地に見られる椿の花の強烈な色は、併し決して薔薇の花の與へる印象ほどに猥らな感じがする強さではなくして、純一に心を籠めた熱情を傳へるのである。これは確かに南國の婦人の心の一面を、よく椿が表現してゐるものと云つてよい。白系統の清楚な趣に對して、かうした赤系統の一途な情熱といふことも、婦人にふさはしい精神として考へておかなければならないであらう。

もう一つ花の色では、青系統のものがある、藤の花の紫色などはその著しい代表である。或は又、つき草や桔梗の類も、青系統の花であるが、つき草や桔梗の花が、何となく弱々しくはかないものを感じさせるのに對して、藤の花だけは、それらとは違つて、何か力強く豪膽な、賑かな感じを與へる。それは、藤の蔓の強靱な弾力と相俟つて、花房に多くの花が密着してゐる粘りづよさの感じでもある。そんな事から藤の花に、一種の情熱、又、意志力といふやうなものを認めてよいであらう。もし、赤系統の花に情を、白系統の

花に知を感じるならば、かうした青系統の花には、何かみづからの意志を含んでゐるものがあるやうに思はれる。従つて、女性の心にも亦、それぞれの色を持つ花の姿にふさはしい個性が生きてゐるはずである。春の梅見や櫻がり、初夏の藤見といふやうな催しは、たゞ花を見て楽しむといふだけではなく、花の心に觸れて、わが求めるところを満たさうとした、精神の充實に、眞の目的があつたのではなからうか。

三

花を見て心を慰めるといふのは、東西いたる所に見られる人情であるが、特に東洋においては、これを自然の姿において鑑賞し、神の御しわざをけがさないやうにするのが、東洋人のたしなみとなつてゐる。この心において、華道といふものが理解せられなければならぬ。いたづらに撓め曲げて、不自然な整形の美を作るのでは、人造の花と殆ど變りがない。むしろ、「やはり野におけれんげ草」と云ひ捨てた言葉の中に眞理がある事を、は

つきりと知つておく必要がある。

さうした自然の花の生態と云つたやうなものを考へると、こゝにも、花はいかにも女性にふさはしい特色を持つてゐる事が見出される。蕾の花が開いて、花粉が受胎の作用を終つて、遂に實を結ぶまで、それはすつかり婦人の天職を、しかも極めて美しく示してくれるものに他ならない。そこでは動物的な穢らしさが嫌忌の情を呼びさますことなしに、人間の必要な営みを自然に教へてくれると云つてよい。

それのみならず、雪間の梅の力強さと云ひ櫻の花の散りぎはの潔きよさと云ひ、更に、濁りに染まぬ蓮の花の淨らかさと云ひ、花を見つめるとき、これはおのづからに婦人の精神が形象化された自然の存在たる事を感じさせるのである。花は決して、單に花顔であるばかりではなく、まさに花心でなければならぬ。花言葉といふ表現が女性にふさはしいのも、ただ言葉の綾が、花を意味あるものとさせるばかりでなく、女性の心にひそむあこがれの情を、花が代りに十分云ひつくしてくれるからである。それと同じ心持を、平安時

代の宮廷の人々は、服飾で表現して、襲の色目といふものを作り上げた。衣服の表と裏との色合、或は、幾枚も衣服を重ねるときの相互の色彩の配合を花の名によつて示したものである。それは、花に敏感な當代の婦人の好尚が、衣服の色あひにも花を象徴した美しい名を負はせるほど洗煉せられた趣味に磨かれてゐたためばかりでなく、却つて、女性の精神が持つ無限の愛情を、自然の花に求めて、わが日常の生活においても、その暖い光を輝かさうとした結果、婦人が最も親しみ愛すべき衣服の上にまで、これを移し植ゑたものとしなければならぬのである。

日本人の感覺

日本人の感覺が鋭敏で、しかも繊細な事は、わが國が島國であると共に、山紫水明の變化多く清らかな國土を持つてゐる賜物である。これは大陸の茫洋たる風土が、大陸の民族に影響して、神経が遅鈍で、感覺の弛緩した性質を作り上げてゐるのと好對照をなすものである。併し、これは相互にそれらが長所ともなり短所ともなつてゐるのであつて、大陸性の遅鈍な所が、一方から見れば、こせこせしない雄大な氣象を現はしてゐるとも考へられるし、又、日本人の鋭敏な感覺は、とかく神経質な人間を生じて、小事に拘泥する弊がないとも云はれない。要するに、それぞれの特色を、自覺して、それに反省を加へるところから、それらを生かして、その特色を發揮することも出来るやうになる。さうすれば、

すべての事が、長所となつて、短所の弊風が除去せられるのである。

日本人の感覺は、まづ四季をりをりの氣象、風物に鋭敏に感應するところから、その生活や文化に對する著しい反應が始まるのである。例へば、わが國には洋服の種類が多過ぎる。夏服、冬服、合服など、種々あるが、その點は、却つて外國人よりも贅澤なほどである。併し、これは、和服が夏の浴衣、冬の袴、中間のセルの着物などと變化するのに應じたもので、むしろ氣候に對する適應性が鋭敏な感覺をとほして、その生活の中に表現せられてゐる結果である。

かうした現象は、趣味性の發達してゐた平安時代には、特に著しく認められる事である。平安時代には衣服に襲の色目といふものがあつた。これは、衣服の表と裏、乃至、上に着る着物と、下に着る着物との色の配合を稱するのであつて、それが四季をりによつて定まつてゐた。例へば、正月に着る若菜は表が薄青で裏が濃青、三月四月に着る藤襲は表が薄紫で裏が青、四月の卯の花襲は表が白で裏が青、五月六月に着る撫子は表が紅梅で裏

は青、又、九月十月頃に着る菊襦は表が白で裏が青（初夏の卯の花襦と色目は同じであるが、地が違ふ）、黄菊は表が黄で裏が青、紅菊は表が紅で裏が青と云ふやうに、種々あるが、これらの色目が、四季の植物の象徴として、その時期の植物の色合を思はしめるものがあるのは、色彩感覚に働く、季節の感覚の融和を認めなければならぬのである。菊の時分に、その菊の種々の色合によつて、白菊、黄菊、紅菊などの色彩を表に出し、裏をいづれも青としてゐるのは云ふまでもなく、菊の葉の間に浮ぶ花の色の感じを出さうとしたものである。これは極めて素朴な表現のやうであるが、むしろ、かうした名稱によつて、素朴な色彩の配合の間に、季節の植物の特色を捉へ、それによつて、季節の感じを象徴的に匂はせてゐる、感覚の鋭敏さを思はなければならぬと思ふ。つまり、これは單なる色彩の刺激ではないのであつて、外國の衣服の色模様には、多分に、ただ色彩から受ける感覚の直接の刺激に重點を置き、そこに、對色とか類色とかいふ、云はば色彩科學に基づく色彩の美を捉へようとしてゐるのに對し、むしろわが國では、直觀的な色彩の美の感覚を外界

の自然との調和の中に認めようとしてゐるのである。このやうにして、ただ衣服の色彩の中においても、四季の季節に適應し生活の環境に順應して、その特色を發揮する感覚の細かい味ひを見ることが出来る。そこに洗煉せられた趣味性が美的感覚において一層鋭い直觀を働かせてゐる事がわかるのである。

このやうな生活に住してゐた當時の人々が、外界の事物に鋭敏な感受力を持つてゐたことは、清少納言の枕草子の巻頭の文一を見ても明かである。春は曙、夏は夜、秋は夕暮、冬は早朝と、いかにも四季そのをりをりにふさはしい特色ある時間を捉へて、その情景に、季節の感覚を見出してゐる。春は夜明方、ほのぼのと夜の明けはなれてゆく頃に、春らしい明朗な氣分を感じてゐる。それは、本居宣長の歌に、やまと魂を、「朝日ににほふ山櫻花」に譬へた心持とも似通ふ、春の特色である。夏の夜の清涼な感じは云ふまでもなく、秋の夕方、月の入る頃の一抔の寂寥を伴ふ爽かさも、秋ならでは味ふことの出来ない感じである。ただ、冬の早朝は變に思はれるかも知れないが、冬の朝早く、殊に雪の朝な

ど、全く汚れのない一面の銀世界の景觀は、やはり冬らしいものである上に、清少納言によれば、冬は寒い方がよいのであつて、朝早く寒さのきびしい中に炭火の赤くかんかんおこつてゐる有様などは、いかにも冬の気分を感じさせる。これが冬の日中、寒さがゆるんで火も消えがちに灰だらけとなつてゐるのは、感心しないと云つてゐるが、これは、冬の感覚をしっかりと掴んだ觀察である。冬の日中の暖かさを喜ぶなどは、未だ感覚を洗煉せられてゐない證據であつて、つまり、芭蕉の句に、

いざさらば雪見にころぶ所まで

とあるのと同様に、冬らしい感覚によつて潑刺とした歡喜を味ふことが出来る境地を表現したものである。

平安時代の襲の色目のごときは、素朴な色彩の表現に過ぎないが、しかも、この素朴な配色の中に、自然美を象徴的に捉へた鋭敏な感覚を藏してゐることを思へば、日本人の感覚が、決して絢爛たる色彩によつて、強い刺激を興へる濃厚な表現の中に求められるもの

ではなかつたことがわかる。淡白で簡素な表現の中に、奥の深い美を感じてゐたのである。つまりそれだけに、感覚の鋭いといふことが云はれるのであつて、素朴な形や色の中に、表に現はされてゐない意味を読みとり、見る事の出来ない色彩や形状を感じるのが、日本人の感覚である。かくして、簡素にして、しかも奥行のある美感が象徴的に受け入れられる。それは克明な寫實やけばしい色どりによつて描き出されるところに、すべての事が説明しつくされて、始めて理解せられるといふやうな感覚とは、甚だ距離があるのである。簡明素朴でしかも季節や風土の變化に富む感覚が、豊かな含蓄をもつてゐるところに日本人の感覚の特色がある。それが却つて、鋭敏でしかも繊細な感覚を持つ所以である。

かうした感覚の基礎に立つて、日本人の生活が営まれるのである。それは、食品などを見ても明らかである。わが國の食料の品種や料理の方法が簡素な美しさを持つてゐる事は、大陸的な濃厚な西洋料理、支那料理などの比較によつても、何人にも明かに知られるところであるが、更に、その食物が、ほぼ同じ動物の肉を食するといふのではなく、野菜物

にしても角類にしても、四季の季節にふさはしいものを食膳に供することによつて、季節の感覚を食物からも味ひ取らうとするのである。それが又、自然に、その食物の天然の味を最も甘く發揮させる事になる。つまり、食物のシユンと云ふのがそれである。夏の鮎を喜び、秋の松茸を楽しむ食味が、古代からの日本人の感覚にびつたりとあつてゐる。さうして、それらの料理も濃厚なフライの類ではなくて、淡白な鹽焼、原始的な焼松茸が、最もその季節の味覺を舌に乗せる。

眼には青葉山郭公初鰹

といふ素堂の有名な句に現はれた初夏の感覺は、眼に見る青葉、耳にきく郭公の聲、さうして舌に上せる初鰹と、あらゆる感覺の機關をとほして受け取られたものであるが、しかも、このやうなあらゆる感覺が、季節の感に集中せられてゐるところに、日本人の生活の表現があるのである。それゆゑ、この句のごとき、決して技巧的にかういふ表現のし方をしたといふのではなくして、日本人の感覺の自然が、おのづから、この句を作り出だした

ものである。

住居のごとき、又、自然に即するのが、わが國の家の原則であるからして、家の作り方は内に集中するのではなく、むしろ外に向つて開放するやうになつてゐる。昔は、柱と柱の間に格子がはまつてゐるだけで、夜や寒い時は、格子を閉める。暑い時や晝は、その格子を上の方に釣り上げたり取り除いたりする。さうすれば、屋根を支へるための柱があるだけとなつて、家の内外の區別を徹して、それは、外の方に開放せられるのである。

この簡素な住宅の中に、素朴でしかも逞ましい感覺が働いてゐる。例へば、茶室のごときも、殆ど何の飾りもない小家屋において、茶道の「侘び」に、無限の自然の力を、その鋭敏な感覺で汲みとつてゐるのが、わが日本人である。これは、石や土で作つた住宅が、さながら料理のフライのごとく濃厚な趣を持つものによつて、自然の感覺を鈍らされてゐる民族には、到底解することの出来ない境地である。

かうした簡素な住宅に喜びを感じるのは、やはり自然に合一する感覺を日本人が持つて

ゐるからで、庭園造りの方法が、外國の花園式の庭園のやうに、人智で造作され模倣化されたものを發達させてゐるのに對し、わが國の庭園が、著しく自然に接近する理由もそこから來てゐる。それで、遠く神代の昔に、素盞鳴尊が、楠名田比賣と結婚せられたときの御喜びを、

八雲立つ出雲八重垣妻籠に

八重垣造るその八重垣を

といふ御歌で表現あそばされてゐるが、この御歌では立ち上る雲を直ちに家をめぐらす垣根と觀じられたのであつて、ここにも早く、自然現象を目するに、生活の一部として、住居を構成するものと認められる自然の感覺の、日本人らしい捉へ方の模範を、お示しになつてゐる。

われわれの感覺は、自然を自然のままに捉へて、直ちに、わが生活の一部に同化してゐるのであつて、それを猥りに加工するやうなことはしない。併しそれは又、大陸的遲鈍と

は違つて、十分に鋭敏な神經を働かせて、自然の本質を感覺的に捉へてゐる。即ち、自然を自然のままにするといふことは、無關心なものではなくして、反對に、非常な關心が自然に對して注がれる結果、自然を加工して、これを變形し、歪曲することに正しく清い感覺が堪へられないからである。かくて、自然が自然のままであるときに、われわれの感情は満足するのであるが、さういふ潔癖性は、又、日本人の持つ感覺の一つの特色でなければならぬ。

既に、素盞鳴尊が「八雲立つ」の歌をお詠みになつた場所は、出雲の須賀宮であつたが、それは、素盞鳴尊が、この地に來られたとき、「我が御心清々し」と仰せられたのによつて、名づけられた地名で、即ち、土地の感じの清くすがすがしく爽やかなことを喜ばれたものである。上代には「青すが山」と云ふ言葉があつて、これも山が感じが青くすがすがしい事を讚へた言葉であるが、このやうに「すがすがしい」感覺を愛するわが國民は、太古より、身も心も清淨潔白であることを願つてゐたのである。

沐浴を愛し、風呂屋が發達してゐることは、やはり、日本人の感覺の潔癖性の現れの一つである。この風呂屋にも、古くは空風呂、即ち蒸風呂と、水風呂、即ち今日の湯屋と兩方の設備があつたが、單に垢を落すだけではなく、これによつて身心の潔めが行はれ、それが又疲勞の恢復ともなるところに、わが國の沐浴の特色がある。即ち、太古より行はれてゐた禊は、水によつて身をそそぎ、身心の清淨潔白を圖るもので、そこには、肉體と精神との祇ひ潔めが希求せられてゐた。その熱心な願望、祈りは、やがて感覺と密接な連關のある國民の本能的な行爲であつたのである。清少納言の枕草子には、純白の紙一枚を得ても、青くすがすがしい新鮮な疊を見ても心が慰められると云つてゐるのも、いかにも日本人らしい感覺の表現であつて、決して派手な裝飾などが必要なのではない。ただ普通ありふれたものの、清淨な新鮮味に接すれば、それだけで心が動かされる。清らかな新しい感覺が、心を満足させるからである。

鋭敏な感覺については、手先が器用であると云はれる特色にも觸れておく必要があらう。併し、又そのために一面、手工業は甚だ精巧なものを發達させたが、機械工業の方は十分な發達を見なかつたといふ弊も見られた。ただここでも考へられることは、幾ら機械が發達しても、それを動かす者は結局人間である以上、人間の鋭敏な手足の感覺が機械の作用を直觀的に敏速に指導するとき、始めて機械にも魂が入つて、最も巧妙な又偉力のあつた運用が出来るものであるといふことを注意しておかなければならない。即ち、單に機械に依存するばかりではなく、わが國民が感覺にすぐれてゐる長所を機械に打ちこむ事によつて、世界に卓越した機械の偉力を發揮させることも出来るのである。しかも機械の用ひ方にも限界があるのであつて、タイプライターは事務的であつても、日本人の感覺に働いて美感を催すものは、やはり腕の先から親しく書き出だされた文字でなければならぬ。ここに書道といふ歐米には存在しない藝術が發達したのであるが、特に、草假名のごとき優美な書は、わが國民の鋭く細やかな感覺によつて始めて存在する藝術である。

卵の雌雄の鑑別は、日本人の感覺にまつて可能な作業であると云ふが、ここまで來れば

機械も遂に及ばない感覺の働きで、それはすぐれた直観、即ちカンの作用である。わが國民が、このカンにおいて、最も高度に發達した感覺を持つものであることを、最後に附け加へておきたい。

勅題と日本の歌

「農村新年」といふ勅題を仰せ出だされた。農村を大御心にかけてせられる御宸慮のほど、まことに畏多い。農民を大御心にかけてせられてゐる御事については、すでに御製の上で拜誦申し上げたことがあつた。

それは昭和十二年、——この年は、まことに記念すべきわが國の一大轉換の年、一大躍進の年として、まさに明治元年にも比すべき重大な年で、支那事變が勃發した年である。私はこの年の正月、差し聽かれて、歌御會始に陪聽する光榮に浴した。玉座の御間近において、御製の奉誦を拜聽する感激は、筆を以てしては悉しがたい。

御儀は、鳳凰の間で行はれ、天皇陛下、皇后陛下が出御あらせられる。この年の勅題は

「田家雪」で、御製は、

みゆきふる畑のむきふにおり立ちて

いそしむ民をおもひこそやれ

と農民に有難い大御心を垂れさせられてゐるのである。雪の降る麥畑で孜々として働いてゐる農民の勞苦を思ひやらせ給うた、この御製が、御前で奉誦せられたとき、「いそしむ民をおもひこそやれ」と宣はせられる御言葉が、御直きぢきに仰せ出だされた御言葉として、心の底までしみ通つて、何とも云へない感動にとめ度もなく涙が溢れ出た。

私は、あの日の嚴肅な感激を、今もありありと胸によみがへらせることが出来る。さうして、それを思ひ浮べては、魂を淨く強く磨く糧とするのである。

農はわが國の本であり、また、國の力である。租税のことを古く、タヂカラ、即ち、田の力と稱した言葉も思ひ出される。さうして田力は即ち男の字である。さうすれば、わが國の農民や農村が、國を支へる力強い存在であることが明かに思ひ知られる。——そのや

うなことを考へて、特に「農村新年」と、壽ぎ給ふ御題を拜するとき、國體をおのづからにさとさせ給ふ大御心に、すべての國民が、誠忠の心をもつて應へ奉らなければならぬ決意を新しくするに違ひない。農民は申すまでもなくすべての國民が、その職分において、粉骨碎身の努力に奮起すること、それが、あの貴い日の感激に、固く抱いてゐた私のひそやかな誓ひであつた。

かうした大御心を拜することが出来るのも實に、わが國の歌の道の有難さである。しかしてまた、すべての國民が、その胸中の至誠を至尊の御前に披瀝し奉ることが出来る光榮に浴するのにも、同じ歌の道の貴さである。歌御會始の御儀において、選歌は御前で、普通どほりに朗誦せられること一回、特に節をつけて披講申し上げること一回、すなはち、二回も奏上して詠進者の姓名までも披露申し上げるのである。これは無上の榮譽と申さなければならぬ。つくづく忝ない君臣の通ひ路である。かうした、一君萬民の眞實の姿を、眼のあたり示されるものが、實にわが歌道の本質である。このやうな國風の實相を見つめ

るとき、國體の顯現が、そこにあることを、はつきりと知るであらう。

歌の道は、おろそかに踏み行ふべきではない。歌の心は神の心に通ひ、歌の言葉は、即ち、言葉の宿るところである。この歌の神聖を信じる者のみ、よく神意に叶ひ、至誠の情を、至尊の御前にも顯はし奉ることが出来る。謹しみ誠めて、一首の歌に渾身の力をこめ、精神の一切を捧げなければならぬ。承るところによれば、詠進歌は合綴して、乙夜の御覽にも供するといふことである。然らば、いよいよ民の心の、畏きあたりを達する歌の道が開かれてゐる忝なさを、心から拜謝せずにはゐられない。このみ國に生れて、この國語を用ひることの出来る幸福は、わが國民以外の何ものが味ひ知るであらうか。

わが國では、太古から、歌によつて、君臣の間に、御製を賜はり、また臣下の情を奏上する道が開かれてゐた。平安時代以後は、特に、勅撰集として、歌に結集した君臣和樂の文學の大道が實現せられてゐた。しかし、この勅撰集は、室町時代となつて絶え果てたのである。それは武家が、九重の上と草莽の民との間を隔てたからである。ところが、皇政

復古して、御一新の御代を迎へると、特に歌道の眞義をみそなはせられた。明治天皇は、それ以前、古くから宮中で行はせられてゐた歌御會始に、國民の詠進歌を奏上することを聽させ給ひ、爾後これを年々の行事として、聖代の文化の發祥とあそばされたのである。それは明治七年のことであつた。かくて、上古のごとく、再び君臣の通ひ路を開かせられたのである。ここに國本に基づく歌道精神があらためて生命を得ることとなつた。

歌御會始の御製が、御詔勅と同様に、大御心を拜して、厚く感佩申し上げる感激に打たれることは、昭和十七年の御題「連峯雲」を拜誦すると明かである。

峯つゝきおほふむら雲ふく風の

はやくはらへとたゞいのるなり

十二月八日の宣戰の大詔を拜誦したときの無限の感動は、御製を拜誦して一層高まるのである。「むら雲」を早くはらふことにわれらは全力を傾注して、聖慮を安んじ奉らなければならぬ。

勤勞精神の自覺

日本人は荒魂・和魂の二面を備へてゐる。

日本人は、寛嚴の二面を合せ備へてゐることが、そのすぐれた特色となつてゐる。これを昔の言葉では、荒魂あらかたま、和魂やまたまと云つてゐるが、この兩方の魂は、同じ日本人の心が持つ兩面であつて、しかも、その時々々の事情で、或は、荒魂が發揮せられ、和魂が働くのである。

女性でも同じ事で、大體においては、女性の特色として、和魂が強く、所謂、ますらをぶりに對して、たをやめぶりたをやめぶりでなければならないが、併し、いつでもさうであるといふわけではない。

畏多い御事であるが、神代の遠い古において、天照大神が、勢ひ荒く高天原に上つて來られた素盞鳴尊を迎へられて、その御心の正邪の御判別が、おつきにならないとき、まづ御みづから、男装をあそばされて、力強く大地に御足を踏み立てさせられながら、雄々しい男性的な叫び聲を發し給うて、御待ち受けになつたのであるが、これは、一朝事あるとき、わが國の女性の態度を、お示しになつたものであると拜察する。

その後、神功皇后が、三韓を御征討あそばされたときにも、御懐胎中であらせられたにもかゝはらず、國威を輝かすために斷乎たる御決意をもつて、神意を戴き給ひながら、三韓に出帥あそばされたのであるが、やはり凛々しい男装の御姿で、敢然と武器をとつて敵に向はれたので、新羅王は、その御威光に伏して、敵對することなく、直ちに降参したのである。

このやうな御事蹟によつても知られるやうに、元來わが國の女性は、決してひっこみがちな、弱々しいものではなく、反對に、力強い信念をもつて行動する、すぐれた本質を古

來備へてゐたのである。武士の間においても巴や板額の勇力は、よく人の知るとほりである。

非常の場合と泰平の場合とは、又、事情が違つてくるから、平安時代とか江戸時代とかいふ、穏やかな時代の女性をもつて、この戦時の女性を律してはならない。平安時代や江戸時代の女性の着物を見ると、甚だ活動に不便なやうに幾つも着物を重ねて着たり、大きな袴や帯のやうなものをつけたりする風俗が發達して來たが、それはあの時代としては、女性の美の一つの特色として、日本的な美しさを發揮したものと見られるにしても、これをもつて直ちにわが國の女性の姿が、いつでもさうであると受けとられてはならない。上古の活動的な婦人、武士の精神に生きた婦人は皆、雄々しく強いものが漲つてゐて、それが姿かたちにも現はれ、すべての舉措動作にも認められて生活のあらゆる方面が質實で簡素な特色を持つやうになつて來るのである。

今日は重大な戦時であつて、しかも、それこそ國運を賭する大戦争であるから、もとより、泰平の御代の婦人の生活ぶりを、そのままに踏襲してゐたのでは決して今日の婦人としてふさはしく、理想的であるといふことが出來ない。まづ雄々しく力強く働く心がけ、つまり勤勞の精神が、婦人にとつても、何より大切な事になる。

尤も、この點は日本婦人の勤勉でよく働くといふ特色を世界でも驚くべきものの一つにしてゐるのであるから、そのやうに勤勞の精神に富む、わが國の婦人の古來の美德をもつと立派に發揮するやうにとめればよいわけである。殊に地方の田舎婦人の働きぶりといふものは、全く驚歎に値する。ただ都會地になると大分様子が違つて來るのは、都會になるほど、悪い平和感が漂うてゐて、田舎のやうに、生活の中にみづから生み出すといふ生産の力を持つてゐない點にある。つまりたゞ消費するだけの文化と、生産してゆく生活との差がその根本に横はつてゐるのだが、今日最も必要な事は、もとより後者でなければならぬ。

ここで一番大切な婦人の心がけとして云ひたい事は、婦人は、わが子を生み育てる事に

よつて、國家の發展に參じ、國力の伸張を増益する天職のある事で、この點は、男子が、どんなに力んでも婦人には到底及ばない。それで、母が子を育てる覺悟として、眞に神を敬ひ、大君の醜の御楯となる、心からの勤皇精神を養ふやうに、家庭で努めてもらひたい。それこそ、日本の母としての第一の大切な務めである。つまり、國體に徹底した教育が、家庭で授けられなければならないのだが、そのための婦人の責任が最も重大であるといふ自覺に生きる事、これを何よりも、婦人の生活の根本信條にしてもらひたい。

とにかく、子供に對する責任、それから戦時の社會を背負ふ婦人の勤勞の精神と、この二つが最も大切な婦人の職分である。これからの婦人の分け持つ分野は、家庭と社會との兩面にわたるので、今までよりも二重の負擔になるが、その困難なむしろ過重の境を戦ひ抜いて行くところに、戦時の日本婦人の使命がある。

新選「愛國百人一首」について

愛國百人一首の選は時宜に適した試みであつた。しかも、その選の中には、人口に膾炙した歌が入つてゐたが、却つてそれによつてその歌の普遍性が一層確かに承認せられたやうで、むしろさうある方が、この百人一首の普及の上にも、効果があるのではなからうかと思つた。例へば、本居宣長の「しきしまのやまと心を人とはば」の歌が入つてゐるのは甚だ當を得た選である。宣長の歌の中では、玉矛百首の歌が愛國歌としてすぐれてゐて、百八十と國はあれども日の本の

これの倭にます國はあらず

その他、この選に入れるものにふさはしい作があまたあるが、併し結局のところは、み

づから自畫像に題した「しきしまの」の歌が選ばれるべきであらう。

上古から廿三人、平安時代から十八人、鎌倉室町時代から十六人、而して残りが近世となるから、全體の過半数が近世の作で占められてゐる事になる。これは當然の歸結と思はれるが、一面から見れば、歌における愛國の精神の昂揚と時代との關係を暗示してゐるやうで面白い。その點、近世において國學思想が發展するに伴ひ、愛國精神も亦、著しく自覺せられて來た狀態を反映するものである。かうした關係は、近世について上古に、その數が多いといふこと、次には鎌倉室町時代で、平安時代が最も少いといふ事實に照して見ても、成程と合點がゆくので、つまり、この愛國百人一首には、時代の精神が正直に現はれてゐることを思はなければならない。その點萬葉集の中でも、防人の歌が、相當多數入り、元寇の時の歌、吉野時代の歌、それから幕末維新の志士の歌が一團となつて選ばれてゐることは、はなはだ當然な現象であつた。

このやうに、歌が愛國の精神と結びついて力強く心を鼓舞した歴史の動きを、この百人

一首の中に、はつきり認めることが出来るのだが、ただそれは、必ずしも、歌の藝文としての志のすべてではなかつたといふことも知つておく必要がある。なぜなら、この愛國百人一首に、記紀の歌から一首も出てゐないといふ事實が、それを證明するし、又、作者不明の歌もとられなかつた點に、さういふことが考へられる。殊に歌の水みな上かみとしての記紀の歌は甚だ貴いものであるが、その歌が選び入れられなかつた事は、残念な氣がする。

歌の歴史を満たすためには、紀貫之といふ人も忘れてはならない歌人であるが、この人の作もやはり洩れてゐる。その作の中に、愛國歌としてふさはしいものがなかつたのであらう。ただ、このやうな事から、長い歴史をもつて行はれて來た小倉百人一首の生命が、必ずしも、これによつてとつて代られるものではなからうといふ事が考へられる。つまり愛國百人一首の意義と併行して、小倉百人一首も、十分に存在の理由を持つてゐると、私は思ふのである。まして、小倉百人一首の歌を、一首もこの愛國百人一首にとらなかつたといふ處置は、一層、兩方が共に行はれてよい事を示すものであらう。小倉百人一首の精

神史上の意味にまで及ぶ餘裕がここにはないが、一部の人が考へてゐるやうな浅いものではないといふことだけは、はつきり云つておいてよい。それは、本居宣長が國學に志した動機は、契沖の書いた小倉百人一首の解釋の書、「百人一首改觀抄」を讀んで深く心に感じたからであるといふ一事によつても明らかである。それで、愛國百人一首が出たから小倉百人一首をなくしてしまはうといふやうな、性急な、歴史を無視した云ひ方には、私は賛成しない。この事に限らず、國語でも、漢字の使用の數を限つてしまふとか、ある一つの事が定められると、歴史的に傳へられた傳統の本質や、國民に滲透した影響の深さといふやうな事を考へずに、何でも一方的にきめて、他はすべて禁止してしまふといふやうなやり方をするのは、文化の方面では甚だ危険な事で、大いに注意しなければならぬところである。愛國百人一首には、女性が四人出てゐる。全體の數に比して、少きに過ぎるやうであるが、從來の女性の詠風から考へると、致し方のない事かも知れない。その四人の中、二人まで萬葉歌人である。就中、遣唐使人の母の

旅人の宿りせむ野に霜降らば

吾が子羽ぐくめ天の鶴群

は、子を思ふ母の情を述べた絶唱である。

成尋阿闍梨の母の歌も有名な歌で、藤田東湖が大へんほめてゐる。幕末期では、野村望東尼が女性を代表してゐる。この時代には、勤皇烈女も多く出たが、特に詠歌にすぐれてゐるのは、望東尼と共に、宇都宮の人、手塚増子がある。この婦人は、愛國百人一首の中に入つてゐる兒島草臣の妻光子の母で、草臣を養子としたのであるが、勤皇の運動に奔走する草臣を勵まして、數多のすぐれた歌を残してゐる。

大君に身は捧げんと思へども

世にかひなきは女なりけり

しきしまの道は一つを女なりとて

なに劣るべきやまと魂

女にこそあれ我もゆくべき道を行きて

やまと心は劣らぬものを

つるぎ太刀いよよとぎつゝ大丈夫の

きよきいさをはのちに知られよ

など、いづれも志操の凛然とした愛誦すべき名歌である。この女性が入らなかつたのは多分草臣が選ばれてゐるからであらう。

草臣と同じ宇都宮の人、大橋訥庵の妻卷子も亦文學にすぐれてゐる。

天がける魂の行く方は九重の

御階のもとをなほやまもらん

のごとく、護國の英靈をうたつた歌が見られる。この人のごときも選ばれてよかつた女性ではないかと思ふ。

この愛國百人一首によつて、始めて、世に知られた人もあり、又、世に名高くなつた歌

もある。天忠組の一人、澁谷伊與作や、禁門の變で死んだ津田愛之助などがそれである。

寛政の三奇士や國學の四大人の歌は、それぞれ並んで入つてゐるが、天忠組の三幹部としては、松本奎堂と吉村虎太郎の二人が入り、最も先輩である藤本鐵石を除いて、別に澁谷伊與作が加へられたとき、又、理由のある事であらう。但し、鐵石は、決して歌が拙かつたわけではない。

良寛が洩れてゐるのも、時世であつて、又この愛國百人一首の性質上、當然であると思ふが、忌憚なく云へば、それと同様の意味で、大隈言道なども省いてもよい人ではなからうか。私は言道の歌を、あまり高く評價してゐない。言道の代りに、立派な志士のすぐれた歌を、一人でも多く入れてもらひたかつた。

楠正行があつて大楠公がないのは、正成の歌として確實なものが一首も残つてゐないためである。和氣清麻呂や正成のやうな殉忠無二の士にして、歌がないために、百人の一人としてその名を傳へることが出来ないのは遺憾であるが、こればかりは、どうも致し方の

ない事である。

賀茂眞淵は、有名な

もろこしの人に見せばやみよしのの

吉野の山の山櫻花

と云つたやうな歌の代りに、

大御田の水泡も泥もかきたれて

とるや早苗はわが君の爲

といふ歌が入つてゐるのは、撰者の言のやうに、農作の勞を特に考慮したものであらう。前の櫻の歌のごときは、宣長の歌などで代表せられてゐるから、ここには趣の變つた取材の歌をとつたものと思ふ。大伴旅人の

やすみししわが大王の食國は

大和も此處も同じとぞ念ふ

のごときは實に名歌で、外地に出向する人などには、殊に愛誦して忘るべからざる歌であると思ふ。かうした從來多く知られなかつた名歌が、これによつて、世に普く知られることになつたのは喜ばしい。

最後に、これと同じ愛國百人一首の試みは既に芳賀矢一博士にもあつて、國體百首と云ふ。御製は格別として、その選び入れた歌人や作品をこれ等と比較して見ると甚だ興味が深いと思ふ。芳賀博士のも各時代に渡り、明治時代まであつて、やはり幕末の志士の歌が多く出てゐるが、さういふ點、芳賀博士は先覺者であると云はなければならぬ。なほ、古くは徳川齊昭の明倫歌集、新しくは日本國粹全書の國粹歌集(和歌の部)には、各時代の愛國歌が集めてあつて、多分、今度の選の参考にでもなつたかと思ふが、甚だ便利な良書である。又、幕末期の志士の作だけなら、勤皇文庫の詩歌集がよい。志のある人は、もう少し識を廣く思を深くして、さういふ書物により、歌に現はれた尊皇愛國の至情を體得せられる事を望みたい。

著者略歴

- 一、大正十四年東京帝大文學部國文學科卒業。
- 一、昭和三年以來浦和高等學校教授。
- 一、日本文學報國會議事。
- 一、日本文學部常任幹事
- 一、大日本言論報國會議事。

主なる著書

- 新國學論(昭一六)
- 古典と日本精神(昭一六)
- 平安朝の日記文學(昭一七)

昭和六年十一月五日初版印刷

昭和六年十一月十日初版發行

(三、〇〇〇部)

女性と古典の攷察

出版會承認
イ-160622號



◎定價金一圓八十錢
特別行爲稅額金八錢
相當額金八錢
賣價金一圓八十八錢

著者

藤田徳太郎

發行者

大阪市天王寺區勝山通一ノ三四
鈴木康之

印刷者

岩崎勝章

印刷所

大阪市浪速區稻荷町二ノ九三三
ミスミ印刷株式會社
電話櫻川七八七〇

發行所

大阪市天王寺區勝山通一ノ三四
葛城書店
(日本出版會會員番號二六〇三)
電話天王寺一〇九〇二一
振替大阪一〇九〇二一

東京都神田區神保町三ノ二九江戶ビル
葛城書店出張所
電話九段三〇四六
振替東京一七五九四八

配給元

東京都神田區淺路町二ノ日九
日本出版配給株式會社

萬一丁亂丁等があまりお読後でも發行所でお取替へ致す
(小坂谷製本)

KI 3a
-20

終